

1. 開会挨拶

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

皆さん、おはようございます。昨日、第4回の防災教育推進連絡協議会を開催いたしました。この会は、第1回を釜石で、第2回を田辺、第3回を黒潮で開催させていただき、第4回目は東京にお集まり頂き、3年間の成果について議論させていただきました。

思い起こしますと、たった4回なんですけども、当初の議論から、随分トーンが変わってきたことを実感しております。第1回の頃は、釜石に行きましたので、被災地を目の当たりにして、皆が動揺したんだろうと思います。ちょうどあの時、南海トラフの巨大津波想定が出て、それぞれの地域でどう対応したらいいのか。先生方の目の前には子どもたちがいて、子どもたちにどう生きる力を与えたらいいのか。暗中模索の中で当時の防災教育は、おそらく『逃げる逃げる教育』の一面倒だった。また、そうならざるを得なかったと思います。「とにかく、しっかり逃げられるようにする」、「そのためにはどうしたらよいか」、そればかりを考えていました。

しかし、生きのびるために精一杯やりながら、子どもたちと向かい合っているうちに、少しずつの先生方の思いに変化が生じてきたように思います。「ひょっとしたら東日本大震災のようなことがこの町で起こるかもしれない。でも、先生は皆に死んで欲しくないんだ。津波なんかで死んで欲しくないんだ。災害なんかで命を落としちゃならないんだ。」という先生方の思いを子どもたちに伝える。当時は「形式的で通り一遍」と言っただけなんですけども、さほど工夫もない、ただただ一生懸命やる防災教育だったと思うんです。それでも子どもたちに伝わったものはあったように思うんですね。

子どもたちは、「自分の命は自分で守る」ことは当然のこととして、「自分は先生方にも大事に思われているんだ」ということに気付く。そして、ふと考えれば、「お父さんやお母さんは、自分の命をお父さんお母さん自身の命以上に大事に思っていてくれる」ことにも気付き、家庭を見つめ直す。そして、



片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

皆で議論していく中で、『地域共通の敵である津波』に自分だけで向かい合っているんじゃない。地域全体でそれに向かい合っているんだ」ということに気付いた時に、自分達だけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、小さな子どものことを気遣い、地域を思う心を育む。当初、恐れおののいていた防災教育の状況から、時間の経過と共に、命を守るという事、災害に地域が向かい合う事など、子どもたちの思いも少しずつ広がっていったと思います。

そして、防災教育をやっておられる先生方の思いの中にも少しずつ変化が生じてきたと思います。最初は焦っていた。何とかしたいと思っていた。しかし、子どもたちが取組を通じて、どんどん変わっていく。地域の事を思うようになり、一生懸命取り組んでいく中で、地域の方々の反応があって、自分が認められていく。今までは対社会に対して無力感しかなかった子どもたち。「所詮、僕はまだ子どもだ」としか思っていなかった子どもたちが、自分たちの取組によって地域が動き始める。それを目の当たりにして、凄く自信を持ち、そして、自己有用感を持つ。大きな自信を得ることができたと思います。

そんな中で嬉しい報告もいくつかありました。もちろん、防災教育をやれば、必ずそうなるという事ではないのですが、例えば、自分の命だけではなく、他者の命のこともちゃんと考えられるようになっていく中で、いじめみたいな問題がなくなっていく。自分の役割や友達との関係を見つめ直す機会になったということでしょう。また、今を一生懸命生きることの大切さを実感し、「今、僕は学ぶときなんだ」に気付いたら、やはり学ぶようになる。風が吹けば

桶屋が儲かるみたいな話に聞こえるかもしれませんが、学力の向上すら見られるようになった。非常に幅広い教育効果を僕らは確認することができるまでに至りました。

今日、成果報告のシンポジウムということで、ひとまずの取りまとめをするときを迎えました。この間を振り返って、最初の思いから今日に至るまでの我々の中での防災教育の位置付けの変化を再確認するなかで、これからを見据えていきたいと思っています。

昨日の第4回では、「これからは『防災教育』という言葉を使いたくないよね」という議論もありました。『防災教育』と言っただけで、それイコール『逃げる逃げる教育』みたいに、災害に対して向かい合うテクニカルな **how to** に聞こえてしまう。そうじゃない。防災教育には非常に幅広い教育効果が秘められている。「子どもたちの中にどういふ変化をもたらしているのか」を僕らは感触としては掴んでいるんだけど、まだそれを定型化できていない。それを単に防災教育ではなくて、日本の教育という部分にどう反映していったらいいのかという点についての議論がまだ十分できていないんじゃないか。そんなところまで議論してきました。また『生き方科』という教科科目の提案の話も出てまいりました。我々の議論もある一定の成熟をみてきたのかな、次を見据えるだけの条件が整ってきたのかなと思っています。

今日のシンポジウムをもって、文科省の支援のもとでの連絡協議会のプロジェクトは中締めを閉めようと思います。ここに参加されている先生方の中で、独自の交流も既にスタートしております。大変結構なことです。片田の頭越しにどんどん皆さんが交流して頂いているこの状況ができていて、本当に嬉しく思っております。お互いが刺激し合える、自立的に回る組織になってきました。次年度以降、何らかの形でこの体制を維持し、そして、発展的な活動に展開をしていきたいと考えていることは、昨日申し上げたとおりです。この枠組みの中にさらに、一生懸命にやっている先生方、参考になるような先生方にどんどん入って頂き、このレベルの議論がちゃん

とできるような組織をこのまま維持していきたいと思っております。

一方で、昨日の議論の中でもいくつか課題もあげられていました。一つは、ここに出てきている先生の意識ばかりが高まって、学校に帰ると他の先生方との意識の間に乖離ができてしまっているという問題です。どう広めていくのかという問題が一つ。

もう一つは、教師同士がこうやって交流し、意識が高まっているんだけど、子どもたちの交流が少ない。子どもたちが交流することで大きな成果があることを我々は知っています。何とかこの研究会の活動の一環として、更に拡大していけないか。何とかその体制を確保できるように、現段階ではまだ画策中としか言えませんが、そのへんの体制を整えるように、今努力もしております。

ここで、本プロジェクトに対するこれまでの文科省のご支援に心から感謝を申し上げるとともに、これを更に次のステージに向けて発展的に対応していきたいようにしていきたいと思っております。今日は、さらなる発展に向けての中締めの会としたいと思います。

今日の登壇者を見て頂くと、僕の名前がありません。いつもしゃべりすぎてしまうので、最初の挨拶だけに留めて、あとは口を封じようと思います。主催者である我々ではなく、それぞれの地域で取り組んで頂いたこの皆さんに、客観的に防災教育を、自分たちはどう考え、この3年間取り組んできたのかをお話を頂ければと思います。そうすることで、次に向かつての課題も見えてくると思います。忌憚のない意見を頂ければと思います。今日の会が終わった段階で、統一した何か次に向かつての意識が、皆の共通認識としてでき上がってくることを望んでおります。

この3年間の取組の中締めにあたり、皆さまに感謝を申し上げますとともに、今日ここで新たに、次に向かつての意思の統一ができればと願っております。今日は一日よろしくお願ひ致します。